石田京子名誉教授記念号の発刊にあたって

眞鍋 穣*

石田先生と私

私と石田京子先生との出会いは、私が京大を辞めて耳原総合病院に赴任した1981年に遡る。小児科部長になった私は、24時間の小児救急をはじめたが、人工呼吸器を装着しなければならない患者は、人工呼吸器の扱いに慣れていた救急病棟（現在のICU）に入院を依頼することが多かった。

当時内科の救急病棟の婦長（現在の師長）石田さんは、私をつかまえて、24時間救急をするなら小児科病棟の看護婦を教育して人工呼吸器を扱えるようにしろと説教された。なるほど、ごもっともな意見であったため、私は小児科の婦長と相談の上、小児科病棟に泊まり込んで人工呼吸器の扱い方を教えた。一度慣れると病棟のルーチンができて、さほど怖がらずに人工呼吸器を扱うようになり、髄膜炎や痙攣重積で人工呼吸器装置を迷わず装着できるようになった。石田さんの「苦言を呈す」がなければ変われなかっただろうといまでも感謝している。

そうした経過もあって、彼女が耳原総合病院を辞職すると聞いて、当短大の前身であった専門学校の教員にどうかと紹介したところ快諾していただいた。当時、専門看護師の走りであった呼吸器リハ専門看護師の資格を率先して取得すると同時に、1997以来長年にわたって大阪呼吸ケア研究会世話人も務められ、臨床との接点を大切される一方、教育熱心でもあった彼女は、2003年３月佛教大学社会福祉学科（通信学部）卒業。2005年３月には大阪府立看護大学大学院看護研究科博士前期課程修了と、教員への道を邁進した。

専門学校の短大化後は、介護福祉学科学科長として学生と向き合うと同時に、そこから掴んだ事実を論文化し、また臨床経験を活かした幅広い活動を通じて共著論文を数多く発表してきた努力家であると感じている。

数多くの論文があるが、学生をテーマにした「学生の喫煙と自尊感情との関連及び禁煙への課題」（『日本呼吸器学会雑誌』pp.559-568、2011年）、「短期大学における介護学生の卒業時の介護観の検討～授業・実習との関連と新カリキュラムへの課題」（大阪健康福祉短期大学紀要『創発』第10号pp.3-13、2011年３月）、介護学生教育現場からICFの課題を捉えた「介護過程の展開におけるICFマトリクス情報整理シートの有用性と課題」（大阪健康福祉短期大学紀要『創発』第12･13号pp.14-49、2014年３月）がある。

最近ではICFの教科書作成も行い、常に最先端の動きから目を離さず、社会情勢にも敏感であり続けておられます。特に、介護現場での医療的ケアについても、「介護保険施設の看護師が考える『医療的ケア』における介護職に求められる能力」（大阪健康福祉短期大学紀要『創発』第17号pp.13-26、2018年３月）「介護職の『医療的ケア』に対する思いの変化と看護職に求める連携能力」（大阪健康福祉短期大学紀要『創発』第18号pp.3-13、2019年３月）など精力的であり続けられています。

今後も、本学卒業生をはじめ教員活動を通じて培った幅広い交友関係を活かして、本学の発展に援助をお願いしたいと思います。

2023年１月

（まなべ ゆたか　本学学長）

*大阪健康福祉短期大学